

米国 果実とナッツ類の生産見通し(主要果実抜粋)

米国農務省経済調査局 2024年9月26日

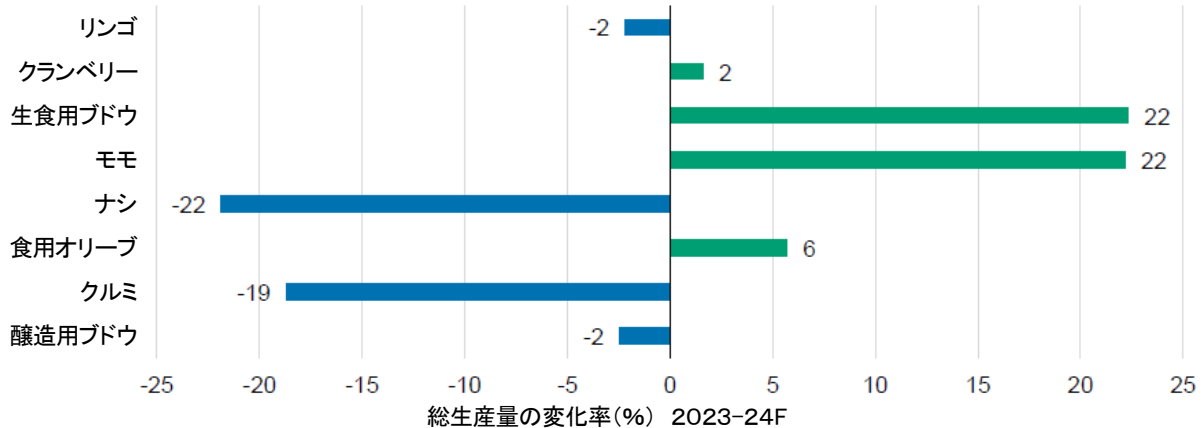
この報告書では、米国の計量単位が使用されています。メートル法の単位への換算率は次のとおりです。

1ポンド=約453.6グラム(1億ポンド=約4万5千トン)、1ト(1米トン、ショートトン)=約907kg(1万米トン=約9千トン)、
1エーカー=約0.4ヘクタール、1ガロン=3.785リットル(1億ガロン=約38万キロリットル)

暑さに打ち勝つ：2024年の生食用ブドウとモモは生産量増加の予測

米国農務省農業統計局(NASS)の2024年の生産予測では、リンゴ、ナシ、クルミ、醸造用ブドウは減少し、クランベリー、生食用ブドウ、モモ及び食用オリーブは増加する。2024年のカリフォルニア州の生食用ブドウ生産量は、夏の終わりの熱帯低気圧の名残によって悪影響を受けた昨シーズンよりも多くなると予想されている。2024年のモモの収穫量も上向きで、南東部の生産量は春の寒波に見舞われた前シーズンから回復する。カリフォルニア州のクルミの生産量は、過去最高を記録した2023年の後、2024年には19%減少すると予測されている。暖冬とそれに続いた夏の極端な暑さが2024年のクルミの収量低下の一因である。

主要果実とナッツ類の生産量の前年比 2023-2024予測値



F = 予測

注：生食用ブドウの予測はカリフォルニア州、醸造用ブドウの予測はカリフォルニア州及びワシントン州の生産量を表す。

出典：農務省農業統計局「作物生産報告書」(2024年8月、9月)及び「2024年カリフォルニア州生食用ブドウ生産性調査報告書」のデータに基づき経済調査局が作成

非柑橘果実の見通し

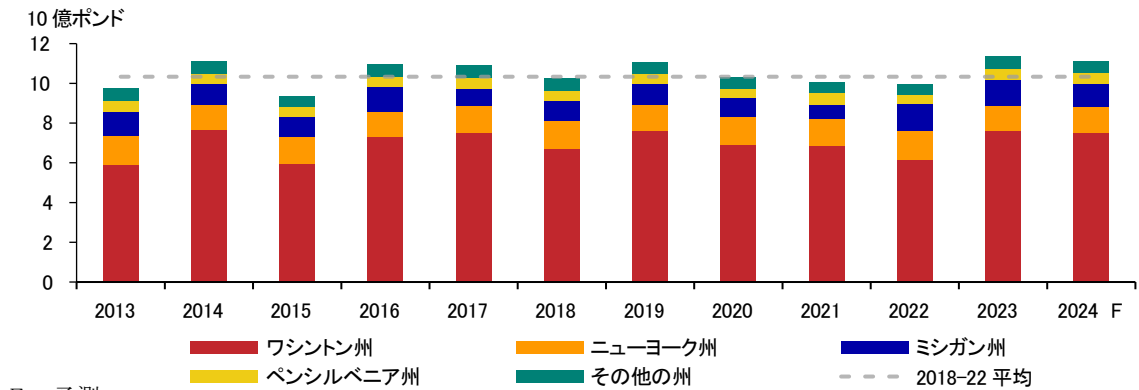
<リンゴ>

2024年の米国のリンゴ予想収穫量は平均を上回る

8月に発表された農務省農業統計局(NASS)の「作物生産報告書」は、2024年の米国のリンゴ収穫量は前年比2%減の111億ポンドと予測されるとしている。2024年の生産量は前年比では減少すると予想されているが、現在の予測は、NASSが調査した7つの州のデータに基づくそれ以前の5年間(2018~22年)の平均よりも依然として8%多い(図3)。

ワシントン州は最大のリンゴ生産州であり、収穫量は75億ポンドと予測されている。これは、昨年からは1%(1億1千万ポンド)の減少となるが、同州の2022年のリンゴ収穫量より22%多い。ワシントン州果実協会は2024年8月に、今シーズンの果実は品質が高く、有機リンゴが同州の生鮮市場出荷量の16%を占めると推定した。平均して、ワシントン州のリンゴの約80%が生鮮市場に出荷される。この生鮮市場出荷の割合は、近年の平均が50%程度である次項以下の3つのリンゴ生産州(ニューヨーク、ミシガン、ペンシルベニアの各州)よりも高い。米国リンゴ協会によると、2024/25販売年度(8月~7月)には、ワシントン州の上位3つのリンゴ品種(ガラ、グラニースミス、レッドデリシャス)が総生産量の46%を占めると予想されている。

図3 2024年の米国(調査対象の7州)のリンゴ生産量はわずかに減少



F = 予測

注: NASSが行なった7州の調査に基づく総生産量。「その他の州」はバージニア州、カリフォルニア州及びオレゴン州。

出典: 農務省農業統計局のデータを用いて経済調査局が作成

ニューヨーク州の2024年のリンゴ生産量は前年から4%回復して13億ポンドに達すると予測されており、ワシントン州に次ぐ2位にランクされている。5月中旬の寒波によって悪影響を受けた昨シーズンとは異なり、農務省農業統計局の9月上旬の作物状況調査では、83%が「良好～優良」と評価された。これは、同時期の5年平均の2倍であり、昨シーズンのほぼ3倍である。米国リンゴ協会は、2024/25販売年度にはニューヨーク州の上位3品種(マッキントッシュ、ガラ、アイダレッド)が総生産量の30%を占めると予想している。

ミシガン州の生産量は、2シーズン連続で13億ポンドを超える過去最高の豊作の後、2024年は12億ポンドとNASSは予測している。そのとおりになれば、2024年の生産量は前年比で減少するものの、依然として2019～2021年の平均よりも29%多く、記録上ミシガン州で5番目にリンゴ収穫量が多い年にランクされる。近年のミシガン州のリンゴ生産量の増加は、密植栽培品種による栽培面積の増加に一部起因している。米国リンゴ協会は、2024/25販売年度にはミシガン州の上位3品種(ガラ、ハニークリスピ、ゴールドデンドリシヤス)が総生産量の45%を占めると予想している。

ペンシルベニア州は2024年に5億1千万ポンドのリンゴを生産すると予測されており、これは米国の生産量の5%に相当する。今年の予測は2023年の収穫量と比較して4,300万ポンドの減少(8%減)であるが、全般的な品質は高いと報告されている。2024年9月上旬のペンシルベニア州のリンゴの状況調査では80%が「良好～優良」と評価され、5年平均(74%)をわずかに上回った。米国リンゴ協会は、2024/25販売年度にはペンシルベニア州の上位3品種(ゴールドデンドリシヤス、ヨーク、ふじ)が総生産量の57%を占めると予想している。

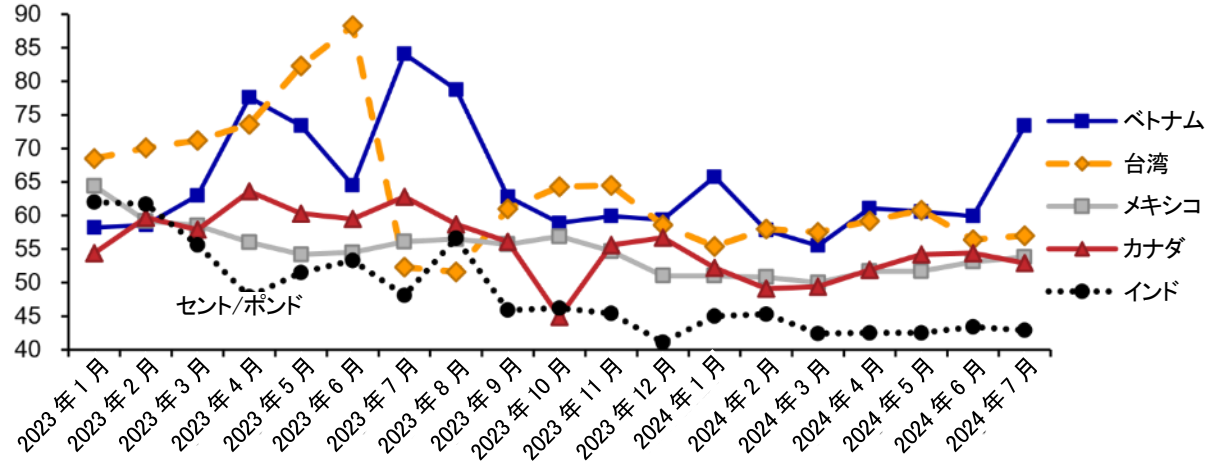
消費量の増加にもかかわらず、2023/24年度シーズン終了時の貯蔵リンゴの供給量は高水準を維持: 昨年のリンゴ収穫量の増加は、2023/24年度を通じて貯蔵リンゴの増加につながった。米国リンゴ協会によると、2024年6月1日のリンゴの総貯蔵量(青果用及び加工用)は前年同期比で約40%増加し、過去5年間の平均よりも25%多かった。農務省農業統計局が報告した2023/24販売年度の生鮮市場月別平均生産者価格は6カ月連続で下落し、2024年2月には販売年度の最低値(0.605ドル/ポンド)に達した。生鮮市場における2024年2月のリンゴの平均生産者価格は、名目と実質(インフレ調整後)の両方で過去4年間の最低であった。農務省農業流通局(AMS)の出荷価格データ(FOB)によると、ハニークリスピ品種は、ガラ、グラニースミス、ふじ等の人気のある他の品種と比較して、2023/24年度初頭に価格が大幅に下落した。2024/25年度の最初の6週間に、ハニークリスピ、グラニースミス及びふじのFOB価格は、引き続き前年同期を大きく下回る水準で推移した。

2023/24年度を通じての貯蔵リンゴの豊富な供給量と価格の下落が、1人当たりの供給量(消費量の近似値)と生鮮リンゴ輸出量の前年比での増加を支え、生鮮リンゴの輸入需要の減少をもたらした。2023/24年度の1人当たりの生鮮リンゴの暫定的な供給量は17.9ポンドで、前シーズンから1.7ポンド増加した。1980年代以降、生鮮リンゴの供給量は年間1人当たり15～21ポンドの範囲で、生鮮果実のカテゴリーでバナナに次

ぐ第2位にランクされており、国内生産量は毎シーズンの総供給量の90%以上を占めている。

2023/24年度の生鮮リンゴの輸出量は増加したが輸出単価は下落： 米国は2023/24年度の生鮮市場向けリンゴ出荷量の約25%を輸出し、2022/23年度から4%ポイント増加した。2023/24年度の生鮮リンゴの輸出量は約20億ポンドで、2022/23年度より6億3,200万ポンド(47%)多く、過去5年間の平均より9%増加した。しかし、2023/24年度の生鮮リンゴの輸出額は、前のシーズンに比べて輸出単価が下落(8.5%減)したことを反映して増加率が小さかった(35%)。米国の生鮮リンゴの輸出先上位5カ国(輸出量ベース)のうち、単価が最も低かったのはインド(44セント/ポンド)で、ベトナムと台湾(60セント/ポンド)が最も高かった(図4)。

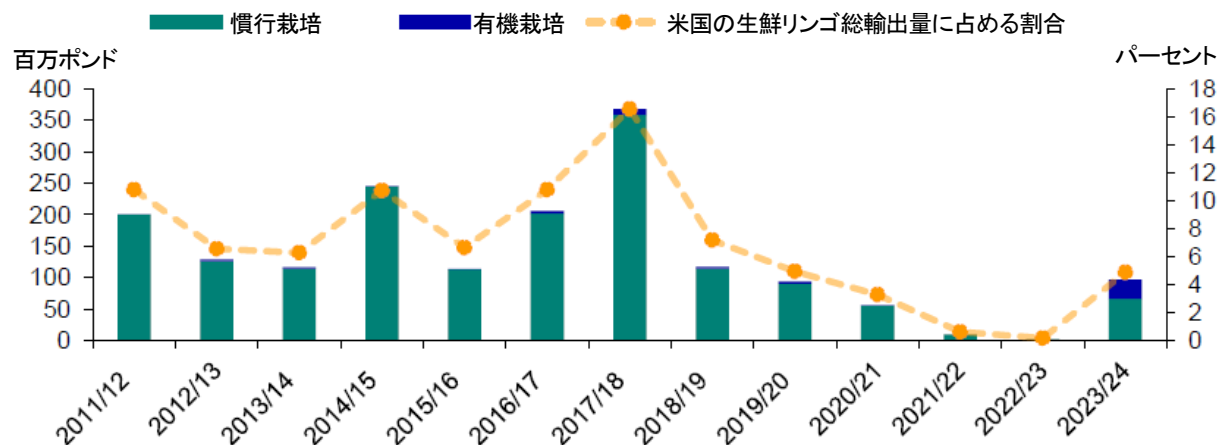
図4 主要輸出先の米国産生鮮リンゴの月間輸出単価
セント/ポンド



出典：米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

2023/24年度の有機リンゴの輸出量が過去最高： 2023/24年度の有機リンゴの輸出量(3億2,800万ポンド)は生鮮輸出量の17%を占めた。有機リンゴ輸出量の65%以上(2億1,500万ポンド)が、最大の輸出先であるメキシコ向けであった。カナダは従来有機リンゴの輸出量で2位にランクされてきたが、2023/24年度にはインドが輸出量の9%(3千万ポンド)を占めて2位となり、カナダ(2,050万ポンド)は3位となった。インド向けの生鮮リンゴの総輸出量(慣行栽培及び有機栽培)は、インドが2019年に米国産リンゴに課した報復上乗せ関税を撤廃したことを受けて、前年比で3,725%増加した(図5)。2023/24年度のインドへの輸出量は過去4年度を上回ったものの、米国の生鮮リンゴの総輸出量に占めるインド向けのシェア(5%)は、依然として報復関税適用前の記録(2017/18年度の17%)を下回った。

図5 2023/24年度の米国の生鮮リンゴのインド向け輸出量は4年ぶりの高水準



注：リンゴの販売年度は8月に始まり、翌年の7月に終わる。

出典：米国商務省センサス局のデータを使用して農務省経済調査局が作成

<ブドウ>

2024年のブドウ生産量は増加

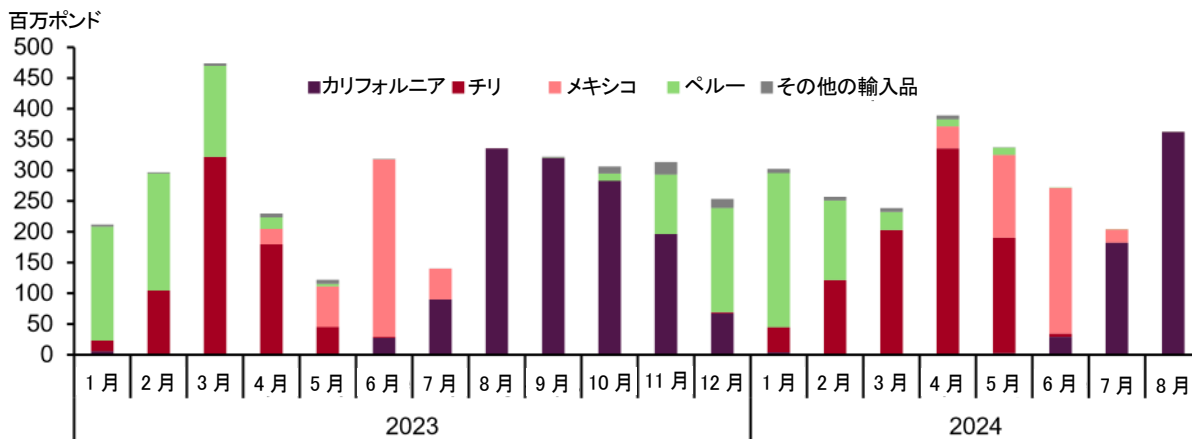
2024年の米国のブドウ生産量は127億3千万ポンドと予測されている。この農務省農業統計局の予測には、カリフォルニア州、ワシントン州のほかニューヨークとオレゴンの2州が含まれている。カリフォルニア州とワシントン州だけを合わせた生産量は、前年同期の118億2千万ポンドに対して3%増の122億1千万ポンドと予想されている。

カリフォルニア州の生食用ブドウとレーズン用ブドウは増加、醸造用ブドウは減少：2024年のカリフォルニア州のブドウ生産量は、2023年の111億4千万ポンドから4%増となる116億ポンドと予測されている。同州のブドウ生産量のうち約62%が醸造用、20%が生食用、18%がレーズン用の品種である。カリフォルニア州の醸造用ブドウ生産量は、前年比2%減の72億ポンドと予測されている。カリフォルニア州の2024年の生食用ブドウの生産量は、前年比22%増で2020年から2022年の平均を上回る23億ポンドと予測されている。2023年には、生食用ブドウの収穫の最盛期にハリケーンの名残の低気圧がカリフォルニア州を襲い、生食用ブドウの生産量は1987年以来の低水準に押し下げられた。カリフォルニア州のレーズン用ブドウの生産量は、2023年の18億8千万ポンドから2024年には21億ポンドに増加すると予測されている。同州内のレーズン用ブドウの生産量は、栽培面積が減少したため、2000年代後半の半分になっている。

ワシントン州のブドウ生産量は減少するとの予想：ワシントン州の生産量は6億1千万ポンドと予測されており、これは2023年より10%少なく、過去5年間(2018~22年)の平均を19%下回っている。そのとおりになれば、ワシントン州の2024年のブドウ収穫量は、過去20年間で2004年と2021年に次いで3番目に少ないものになる。ワシントン州のブドウ生産は、醸造用ブドウ(51%)と果汁用ブドウ(49%)に区分される。同様に、ニューヨーク、オレゴン両州のブドウ生産は、従来から生鮮市場よりも加工市場に集中してきた。2007年から2017年にかけては¹、ニューヨーク州のブドウ生産はほぼすべて(97%)が加工向けであった。そのうち、平均して約70%が果汁用、30%が醸造用であった。オレゴン州のブドウ生産は、すべて加工市場向け、特に醸造用であった。

2023/24年度の1人当たりの生食用ブドウの供給量は8.30ポンドで、前年の1人当たり8.63ポンドから減少した。2023/24年度には生食用ブドウの輸入量が過去最高を記録し、初めて国内生産量を上回ったものの、輸入量の増加は国内生産量の減少を完全には埋め合わせることができず、供給量が減少した。8月から11月にかけて、カリフォルニア州が国内消費向け生食用ブドウの主要な供給地である(図8)。冬の間はペルー産の輸入品が入手可能で、春にはチリからの輸入に、初夏にはメキシコからの輸入に移行する。

図8 生食用ブドウの供給は季節によってカリフォルニア州から輸入にシフトする



注：その他の輸入品には、ブラジル、カナダ、イタリア、南アフリカ、韓国、スペインからの輸入が含まれる。

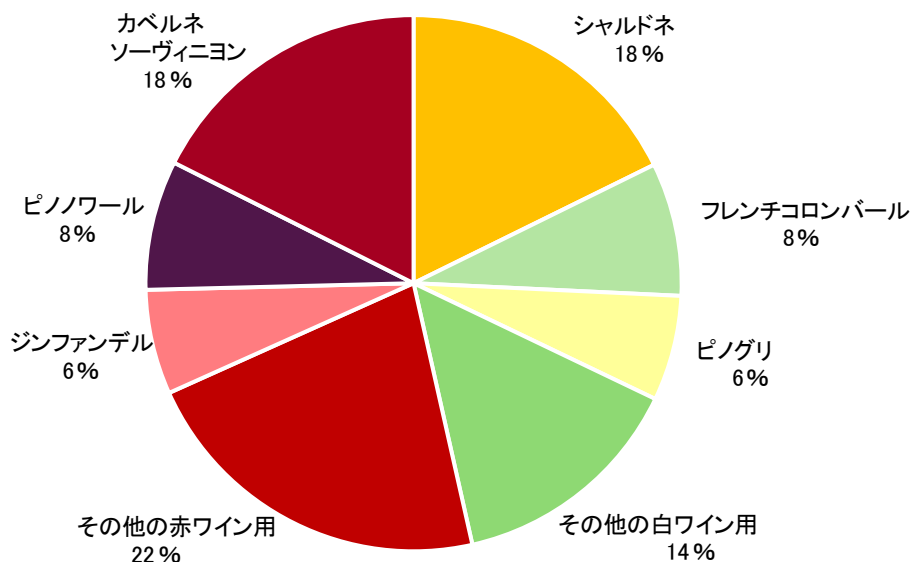
出典：米国農務省農業流通局「マーケットニュース」のデータに基づき経済調査局が作成

1 ニューヨーク州とオレゴン州については、2018~2023年の州レベルの生産量データ及び2024年の推計値が入手できる。

近年、加工用ブドウ(醸造用を除く)の供給量は、1人当たり年間約8.25ポンドであった。このうち約64% (生鮮重量ベース)はレーズン用である。レーズン管理委員会²のデータによると、2023/24年度(8月~7月)のレーズンの総出荷量は前年比4.5%増加した。2023/24年度には、天然の種無し品種が出荷量の88%を占め、ゴールデンシードレス(6%)がそれに続いた。多くの天然種無し品種とは異なり、ゴールデンシードレスは黄金色を保つため収穫後に機械的に加工される。2023/24年度の乾燥ブドウの輸入量は5,590万ポンドで、2022/23年度の6,540万ポンドから15%減少した。

シャルドネとカベルネソーヴィニオンは2023年もカリフォルニア州で破碎されたブドウのトップ品種を維持: カリフォルニア州食品農業局のブドウ破碎報告書によると、2023年にカリフォルニア州で破碎されたブドウは390万トンで、2022年の367万トンから6%増加した。ブドウは、ワイン、濃縮物、果汁、ビネガー、またはブランデーの製造のために破碎される。赤ワイン用の品種は197万トンで、前年同期比3%増加した。赤ワイン用の品種は、破碎されたすべてのブドウの中で最も大きな割合(51%)を占め、次いで白ワイン用の品種(44%)、生食用及びレーズン用品種(6%)であった。白ワイン用品種は171万トンで2022年に比べて15.5%増加した。上位2品種であるシャルドネ(白ワイン用)とカベルネソーヴィニオン(赤ワイン用)は、破碎された醸造用ブドウのトン数の3分の1以上を占めた(図9)。フレンチコロンバール、ピノワール、ピノグリ、ジンファンデル等上位6品種が、ワイン用ブドウ破碎量のほぼ3分の2を占めた。赤ワイン用ブドウは、白ワイン用ブドウよりも平均して価格が高い。赤ワイン用ブドウの平均価格は1,345.68ドル/トン(13%上昇)で、白ワイン用ブドウの平均価格は733.54ドル/トン(6%上昇)であった。2023年の破碎量が多い上位6種類のワイン用品種のうち、カベルネソーヴィニオンが1トン当たりで最も高価(2,124.33ドル)であり、フレンチコロンバール(白ワイン用品種)が最も安価(318.49ドル)であった。すべてのワイン用品種の中で、カベルネフラン(赤ワイン用)はトン当たり4,544.50ドルで最も高価であった。

図9 カリフォルニア州で破碎されたワイン用ブドウの品種別割合 2023年



出典：農務省農業統計局とカリフォルニア州食品農業局が共同で発行した「カリフォルニア州ブドウ破碎報告書 2023年度」のデータを用いて経済調査局が作成

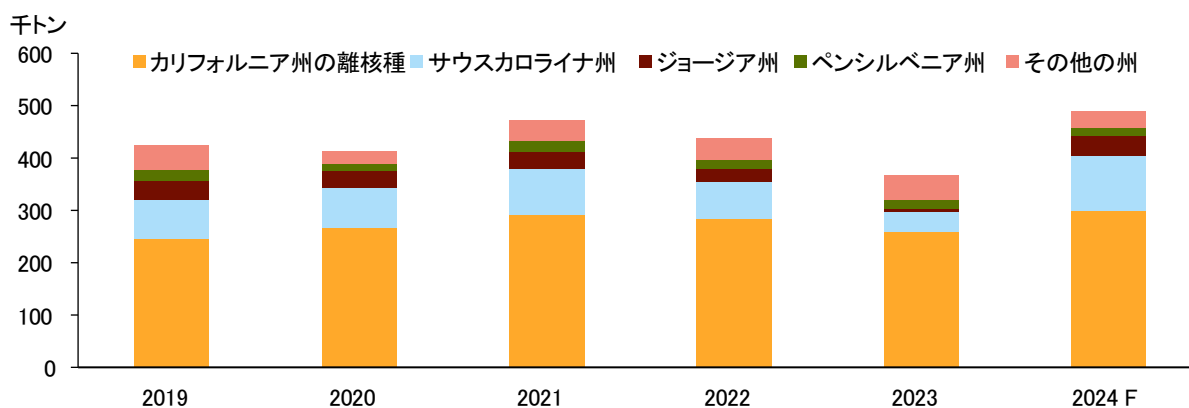
² レーズン管理委員会は、米国農務省(USDA)の権限の下で、カリフォルニア州で栽培されたブドウから生産されるレーズンを規制するレーズンに関する連邦マーケティング令を管理している。

<モモ>

2024年の米国の生鮮モモ供給量は増加

8月に発表された農務省農業統計局(NASS)の「作物生産報告書」は、2024年の米国のモモ生産量を前年比22%増の71万9千トンと予測している。モモの生産量が最も多いカリフォルニア州では、離核種と粘核種のモモの生産量は、前年に比べてどちらも(それぞれ16%及び4%)増加すると予測されている。平均して、カリフォルニア州産の離核種のモモの約70%が生鮮市場に出荷されるが、粘核種はほぼ加工市場専用に栽培されている。NASSが調査した他の州のモモは、主に離核種で、生鮮市場向けに栽培されている。NASSが調査したすべての州の予想収穫量をカリフォルニア州の離核種と合わせると、離核種の推定生産量は昨年より35%多い(図10)。

図10 2024年のカリフォルニア州の離核種と南東部のモモにより生鮮モモの供給量が増加



F = 予測

注: カリフォルニア州の粘核種は含まない。その他の州は、コロラド州、ミシガン州、ニュージャージー州及びワシントン州。

2024年以降、ワシントン州は農務省農業統計局の年次調査に含まれなくなった。

出典: 農務省農業統計局「非柑橘果実及びナッツ類要覧(各年)」及び「作物生産報告書(2024年8月)」のデータを用いて経済調査局が作成

南東部のモモの生産量は昨シーズンの減少から回復: 2024年のサウスカロライナ州とジョージア州のモモの生産量は、凍害を受けた昨シーズンを大きく上回る(それぞれ171%増及び651%増)と予測されている。そのとおりになれば、今シーズンの収穫量はサウスカロライナ州では2010年以来、ジョージア州では2016年以来の最大となる。6月末時点でサウスカロライナ州のモモの88%以上及びジョージア州のモモの99%が「良好～優秀」と評価され、品質は高いと報告されている。8月中旬までに両州のモモの収穫は90%以上完了した。

暑さの影響を受けたカリフォルニア州のモモ: カリフォルニア州の離核種のモモの今年の収穫量は30万トンと予測されている。そのとおりになれば、5年間の平均を11%上回り、2012年以降カリフォルニア州で最大の離核種の豊作となる。春の天候が良好なため着果量が増えたが、セントラルバレーで夏の高温が長引いたため、8月と9月の間に熱波関連の品質の低下が増加した。カリフォルニア州の粘核種生産者らは8月中旬に、今シーズンの出荷量に占める低品質な果実の割合が高いのは、極端な暑さが原因である可能性が高いと指摘した。果実の成熟が果樹園内で不均一なことが増えたと報告されている。

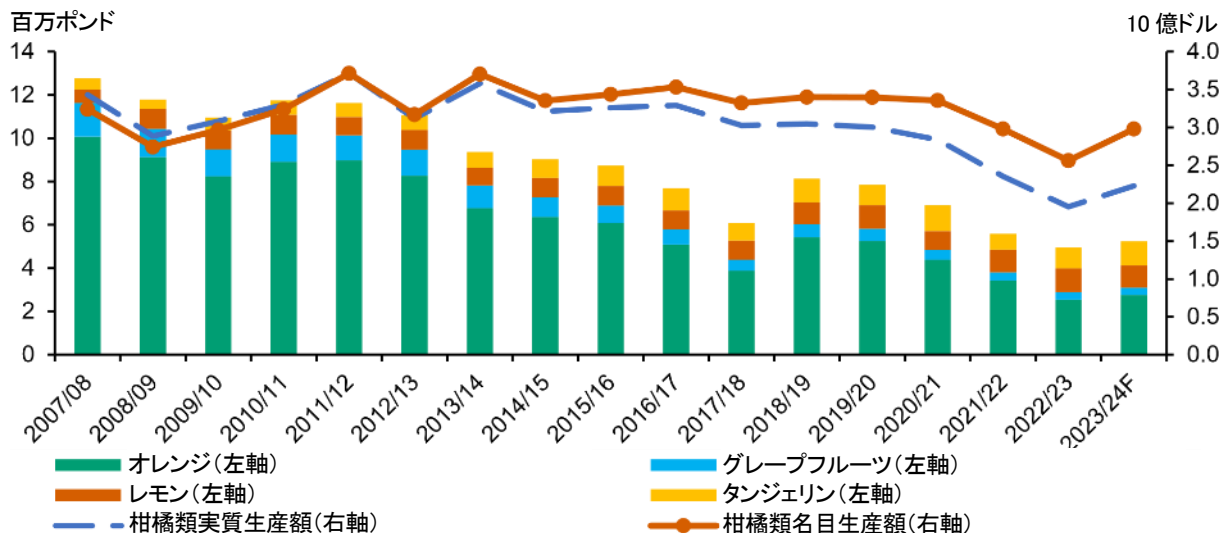
国内生産量の増加と価格の下落により、今シーズンの米国の生鮮モモ輸出量は増加した。2024年の年初来7月までの輸出(生鮮モモとネクタリンの合計)は、前年同期に比べて数量ベースで50%、金額ベースで21%増加した。カナダとメキシコが引き続き最大の輸出先で、輸出量の84%を占めた。

柑橘類の見通し

米国の柑橘類総生産量は依然として少ない

NASSによる2023/24年度の柑橘類生産量の最終的な推定値が、2024年8月29日に発表された。国内総生産量(すべての柑橘類の合計)は520万トンで、推定生産額は29億8千万ドルであった(図23)。

図23 2023/24年度の米国の柑橘類総生産量は520万トン、総生産額は29億8千万ドル



F=予測

注: 柑橘類の実質生産額は、2012年を基準年とするGDPデフレーターを使用してインフレ調整されている。GDPデータの出典は、セントルイス連邦準備銀行である。

出典: 農務省農業統計局「柑橘類要覧」のデータを用いて経済調査局が作成

NASSによる箱数の最終的な推計値は、柑橘類の生産量の増加がカリフォルニア州のタンジェリン生産量の17%の増加と、同州のオレンジ生産量の7%の増加によることを示唆している。オレンジの生産量の増加は、カリフォルニア州とフロリダ州の両方でバレンシア種と非バレンシア種(ネーブル種及び早生/中生の品種を含む)の収穫量が増えたためである。フロリダ州のオレンジ収穫量は昨シーズンより増加した。しかし、現在の生産量はハリケーン「イアン」以前の水準(2021/22年度)を下回っており、2023/24年度のオレンジの収穫量は87年間で2番目に少ないと予想されている。2023/24年度のレモン生産量は、カリフォルニア州の収穫量の減少と、アリゾナ州のレモン栽培面積の減少により6%減少した。2024年の生鮮柑橘類の需要と供給はともに比較的安定していたが、国内のオレンジとグレープフルーツの業界は引き続き縮小した。

夏の間は国内の収穫量が少なくなる傾向があり、外国産のオレンジ、タンジェリン、グレープフルーツの輸入が、国内で消費される生鮮柑橘類の中で占めるシェアが大きくなる。米国の消費者が今年の9月に地元のスーパーマーケットに陳列されている生鮮柑橘類を調べたなら、チリ、南アフリカ、ペルーから輸入されたグレープフルーツ、オレンジ、タンジェリンやアルゼンチン産のレモンを目にするだろう。これらの国々との確立された貿易チャネルのおかげでスーパーマーケットの棚が埋まり、消費者には年間を通じて選択肢がある。1年間に消費されるすべての生鮮柑橘類に占める輸入品の割合は小さい。ただし、これはオレンジジュースにはもはや当てはまらない。米国の消費者が手にするオレンジジュースの75%が、ブラジルとメキシコから供給されている。

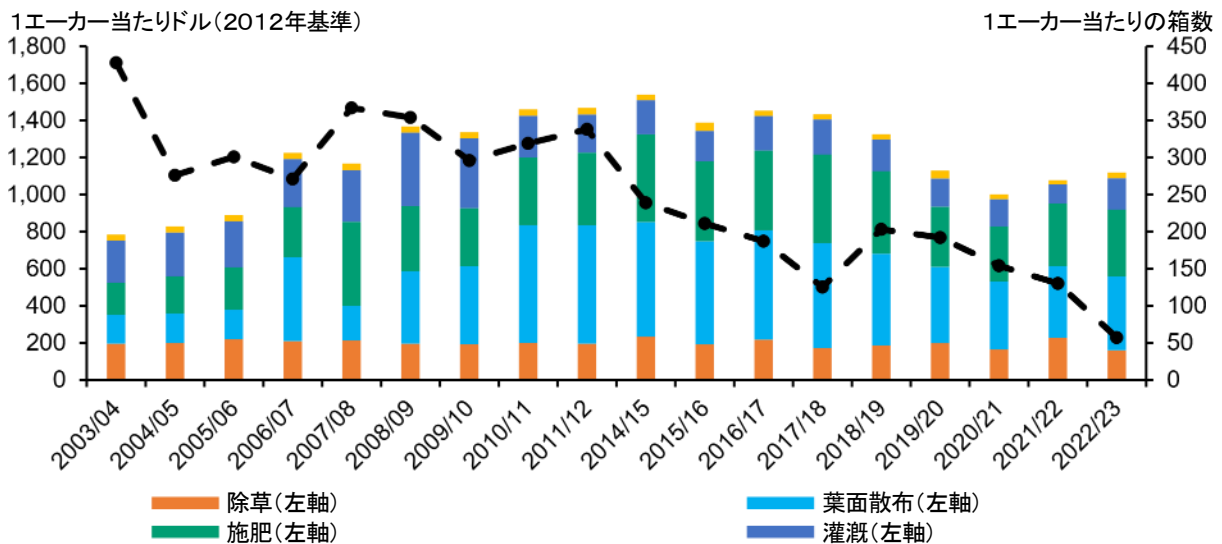
2023/24年度にはカリフォルニア州がフロリダ州よりも多くのオレンジを生産: カリフォルニア州は何十年にもわたって、米国内の生鮮市場向けオレンジに関して最大の供給者であった。しかし、昨シーズンは、すべてのオレンジの総生産量(生鮮市場向けと加工用の合計)でフロリダ州を上回った。カリフォルニア州の非バレンシアオレンジ(ネーブル種及び早生/中生品種等)の生産量は、今シーズン6%増加して150万トンとなった。2023/24年度のカリフォルニア州のバレンシアオレンジ生産量は8%増の37万2千トンとなった。バレンシア種のオレンジは果汁業界で好まれる品種であるが、カリフォルニア州で生産されるバレンシアオレンジ

ジの約3分の2(68%)は生鮮市場向けである。カリフォルニア州のオレンジの収量は、今シーズン、1エーカー当たり351箱と推定され、フロリダ州の収量よりも数倍高い。カリフォルニア州のオレンジ生産者達は、商業的果樹園がこれまでのところカンキツグリーニング病に感染していないため、比較的高い収量を維持することができている。

カンキツグリーニング病(HLB)は、フロリダ州の柑橘類産業に壊滅的な影響を与えた。HLBは、媒介昆虫(ミカンキジラミ)によって伝染する破壊的な細菌性病害である。細菌は、感染した果樹が栄養素を吸収するのを妨げ、したがって果樹の大きさ、健康状態、寿命、及び果実の品質を低下させる。この病害は、2005年にフロリダ州の商業的果樹園で初めて発見され、それ以来、フロリダ州特有の病害となっている。治療法が知られていないため、柑橘類の栽培者は、感染した果樹の健康を増進し、果実の品質を向上させるために、さまざまな管理手法を実践している。それは場合により、農薬や肥料の施用の増加、保護スクリーンの使用、さらに最近では抗生物質の施用等である。HLBによる損失を最小限に抑えるための生産者の最善の努力にもかかわらず、収量は2005年以前の記録を大きく下回っており、面積当たりのコストは上昇している。

2023/24年度のフロリダ州のシーズン平均の1エーカー当たりの収量は78箱で、20年前の2003/04年度にカンキツグリーニング病が始まる以前(同428箱)に比べてほんのわずかに過ぎない。フロリダ大学食品農業科学研究所の研究者達は、20年前にさかのぼってフロリダ州の柑橘類生産の1エーカー当たりの推計コストを発表した。フロリダ州南西部の産地(果汁用オレンジで有名)の1エーカー当たりのインフレ調整済みオレンジ生産コストは、2004/05年度から2014/15年度の間年平均7%増加した(図24)。2014/15年度シーズン以降は、生産者が除草、灌漑、葉面散布(殺虫剤等)のために1エーカー当たり費やす金額が減少したため、コストは数年間にわたって減少傾向にあった。しかし、2021/22年度シーズン以降、コストは再び上昇し始め、カンキツグリーニング病侵入前の2003/04年度の水準を上回っている。

図24 フロリダ州の加工用オレンジの年間生産コスト



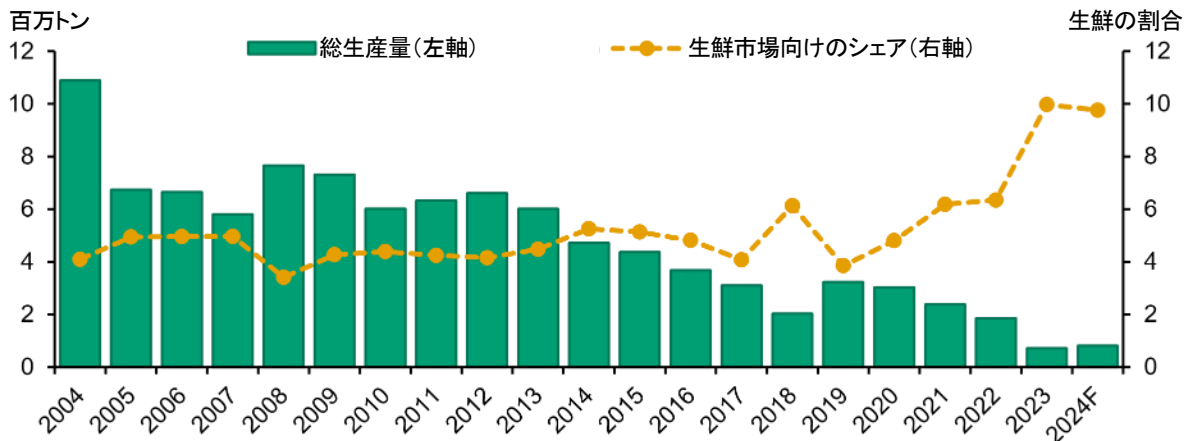
注: ドルの値は、2012年を基準年とするGDPデフレーターを用いてインフレ調整済み。GDPデータはセントルイス連邦準備銀行による。

出典: フロリダ大学食品農業科学研究所「フロリダ州南西部における加工用オレンジの生産コスト」及び農務省農業統計局「フロリダ州年次別オレンジ収量推計値」のデータを使用し、経済調査局が計算

従来からフロリダ州産オレンジの極一部(約4~5%)だけが生鮮市場向けであり、残りは加工用に仕向けられていた(図25)。しかし、近年、生鮮市場向けのオレンジの割合が増加した。2022/23年度及び2023/24年度には、フロリダ州産オレンジの約10%が生鮮市場に出荷された。この増加の理由は明らかでないが、1つの可能性はハリケーン「イアン」が加工向けに生産するフロリダ州の生産者に大きな影響を与え、それが2023/24年度まで続いていることである。もう1つの可能性は、生鮮市場と加工市場の価格差が従来よりも大きいことが、生産者がシバレンシアオレンジを生鮮市場向けに販売する動機となったことである。2023/24年度

に生鮮市場で販売されたバレンシアオレンジの全国平均樹上相当生産者価格は、1箱当たり22.86ドルで、加工市場価格の7.74ドルの2.95倍であった。ちなみに、過去5年間(2018/19～2022/23年度)の平均では、バレンシアオレンジの1箱当たりの生鮮と加工用の価格の比率は1.87倍であったため、今シーズンは生鮮と加工用の価格差が通常よりも大きくなっている。フロリダ州産バレンシアオレンジは、昨年の米国のバレンシアオレンジ生鮮市場の総販売額の約10%を占めたが、今年は約14%を占めると見られる。

図25 フロリダ州のオレンジ総生産量と生鮮市場向け出荷量のシェア



F = 予測

出典：農務省経済調査局「果実及びナッツ類年鑑」の表のデータを用いて同局が作成

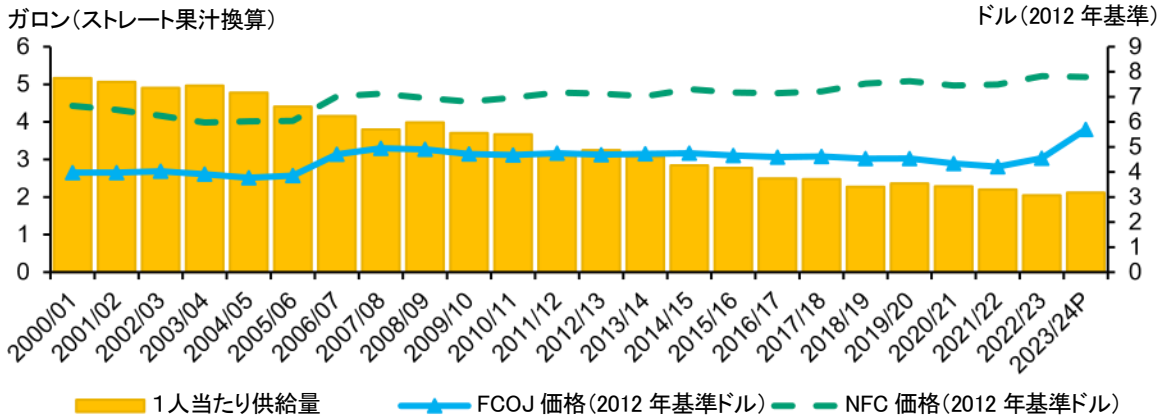
2023/24年度(2023年11月～2024年10月)の生鮮市場向けオレンジの1人当たりの供給量は7.21ポンドで、オレンジ総収穫量(生鮮及び加工用)の増加にもかかわらず、2022/23年度から8%減少した。2023/24年度には、米国のオレンジ収穫量のうち生鮮市場に出荷された割合が小さく(52%)、その結果、生鮮オレンジの国内出荷量は前年比で9%減少した。今年は輸入量が史上最高の5億3,800万ポンドに達したが、国内出荷量の減少を埋め合わせるには十分でなかった。2023/24年度もメキシコ、チリ、南アフリカが、引き続き米国の主要な生鮮オレンジ輸入先になると見込まれる。2023/24年度の生鮮オレンジ輸出量は2%増の7億7,200万ポンドと予測されている。2023/24年度の米国産オレンジの主要輸出先市場は、カナダ、韓国、メキシコであると予想されている。

2023/24年度のオレンジ果汁輸入は減少：国内消費向けオレンジ果汁とグレープフルーツ果汁に占める輸入のシェアが増加している。2023/24年度に米国で消費されたオレンジ果汁の推定78%が輸入品であったが、20年前(2003/04年度)には15%であった。2023/24年度のオレンジ果汁の輸入量は、5億5,280万ガロンと予想されており、昨年から1,300万ガロン(2%)減少したが、それでも過去最高水準に近い。

ブラジルとメキシコは、米国の輸入オレンジ果汁の主要供給国であり、2023/24年度これまで(10月～7月)の総輸入量のそれぞれ67%及び28%を占めている。また、コスタリカはオレンジ果汁輸入の約4%を占めている。2023/24年度のオレンジ果汁の輸出量は3,500万ガロンと予想されており、ハリケーン「イアン」後の低い出荷量からわずかに増加したが、それでも少なくとも過去50年間で2番目に低い水準である。カナダとメキシコは、今シーズンの米国産オレンジ果汁の輸出市場上位2カ国であった。

フロリダ州は2023/24年度もオレンジ果汁の生産量で全米最大：オレンジ果汁は米国で最も人気のある天然果汁100%の飲料で、2023/24年度の1人当たりの供給量の暫定値は2.12ガロンである(図26)。しかし、消費量は、1人当たりの供給量が5.82ガロンであった26年前(1998年)のピーク以来、大幅に減少している。グレープフルーツ果汁はオレンジ果汁ほどの人気はなかったが、同様の軌跡をたどっており、現在の消費量は1998年の10分の1である。このようなオレンジ果汁消費量の長期的な減少にもかかわらず、実質価格(インフレ調整後)は比較的安定している。

図26 オレンジ果汁の供給量とインフレ調整後の価格 2000/01～2023/24暫定値



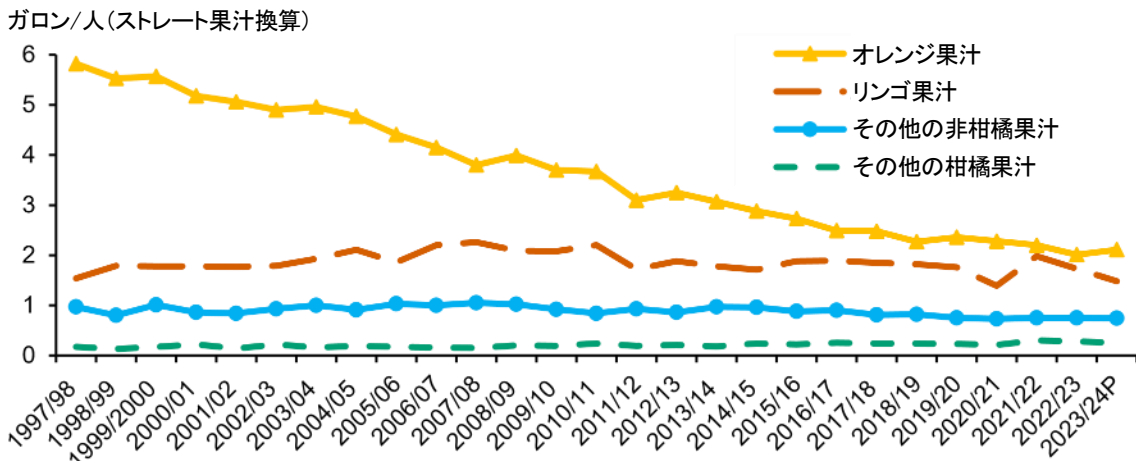
P = 暫定値 FCOJ = 冷凍濃縮オレンジ果汁、NFC = 非濃縮オレンジ果汁

注: 価格は米国労働統計局2012年基準GDPインプリシット価格デフレーターで調整済み

出典: 農務省経済調査局「果実及びナッツ類年鑑」の表及び労働省労働統計局のデータを用いて経済調査局が作成

2004年から2024年の間に非濃縮(NFC)果汁の平均小売価格は年平均1%上昇し、冷凍濃縮オレンジ果汁(FCOJ)の価格は年平均約2%上昇した。しかし、この価格上昇の大部分は、2004/05年度に相次ぐハリケーンのためにフロリダ州の柑橘類の生産量が大きく減少した後の2004/05年度と2007/08年度に発生したことは注目に値する。FCOJの平均実質小売価格は、2008/09年度から2020/21年度までの間、ほぼ横ばいで推移し、2022/23年のハリケーン「イアン」の後に急騰した。オレンジ果汁の実質価格は、1人当たりの供給量が減少しているにもかかわらず過去20年間比較的横ばいであり、これは消費者需要が減少していることを示している。

図27 柑橘類及びその他のフルーツ果汁の1人当たりの供給量 1997/98～2023/24暫定値



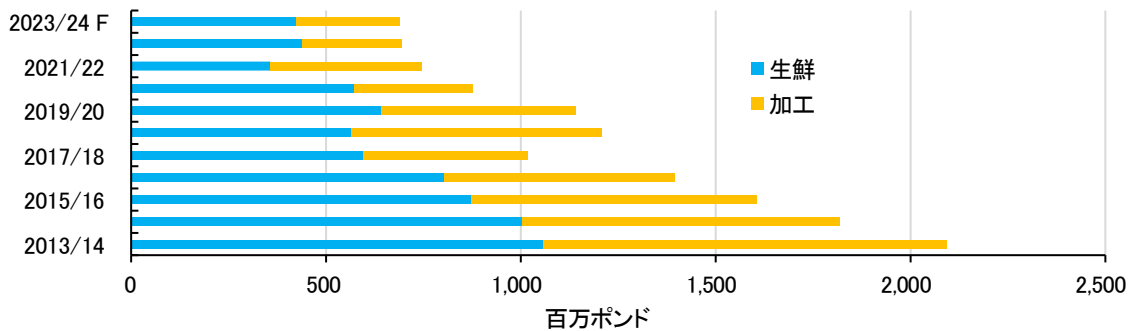
P = 暫定値

出典: 農務省経済調査局「果実及びナッツ類年鑑」の表を用いて経済調査局が作成

対照的に、レモン果汁とライム果汁の1人当たり供給量は、同じ期間(1998～2024年)にそれぞれ年平均4%及び10%の割合で増加した。レモン果汁やライム果汁よりもオレンジ果汁の消費量が多いが、これはオレンジ果汁が添加物や原料ではなく、独立した飲料であるためでもある。しかし、レモン果汁とライム果汁とともに、2022/23年度にグレープフルーツ果汁の1人当たりの供給量を上回った。さらに、柑橘類以外のフルーツ果汁の1人当たりの供給量も次第に増加しており、米国の消費者の果汁摂取量に占める割合が引き続き拡大している。2021/22年度のリンゴ果汁の1人当たりの供給量は1.98ガロンで、同年のオレンジ果汁の供給量に近づいている(図27)。

米国のグレープフルーツ産業は2023/24年度も縮小： 生鮮グレープフルーツの販売年度は9月に始まり、翌年の8月に終わる。グレープフルーツの国内生産は、カリフォルニア州、フロリダ州及びテキサス州に分かれている。カリフォルニア州の2023/24年度のグレープフルーツ生産量は、17万2千トンで国内生産量の50%を占め、引き続き全米をリードした。テキサス州は2023/24年度のグレープフルーツ生産量が増加した唯一の州であり、同州のグレープフルーツ生産量は前年比7%増の9万6千トンであった。今シーズンの国内のグレープフルーツ生産量の約60%が生鮮市場に出荷された(図28)。カリフォルニア州が加工市場に絶対量として最大のグレープフルーツを供給した一方、テキサス州は自州の生産量に加工用が占める相対的なシェア(46%)が最大であった。

図28 加工市場と生鮮市場に出荷されたグレープフルーツの割合 2013/14～2023/24予測



F = 予測値

出典：農務省経済調査局「果実及びナッツ類年鑑」の表を用いて経済調査局が作成

国内の1人当たり供給量で測定すると、グレープフルーツは20年前、オレンジに次いで2番目に人気のある生鮮柑橘類であった。しかし、今シーズンの時点で、米国の1人当たりの生鮮グレープフルーツ供給量は1.34ポンドであり、2003/04年度の水準を70%下回っている。注目されるのは、2023/24年度の輸入量が2022/23年度に比べて68%増で史上最高の8,450万ポンドに達すると予想され、これにより生鮮グレープフルーツの1人当たりの供給量が昨シーズンより増加(2%)したことである。生鮮グレープフルーツ供給量に占める輸入品のシェアは近年大幅に増加しており、今シーズンは過去最高の18%に達すると予想されている。メキシコは、2023/24年度(9月～8月)のグレープフルーツ輸入量で最大の供給国になると予想されている。2023年9月から2024年7月の期間には、メキシコは生鮮グレープフルーツの全輸入量の27%を占め、次いで南アフリカが22%、ベトナムも22%を占めた。生鮮グレープフルーツの輸出量は今シーズン13%増加し、5,400万ポンドに達すると予想されている。カナダが米国産グレープフルーツの最大の輸出市場であり、日本と韓国がこれに続くと予想されている。

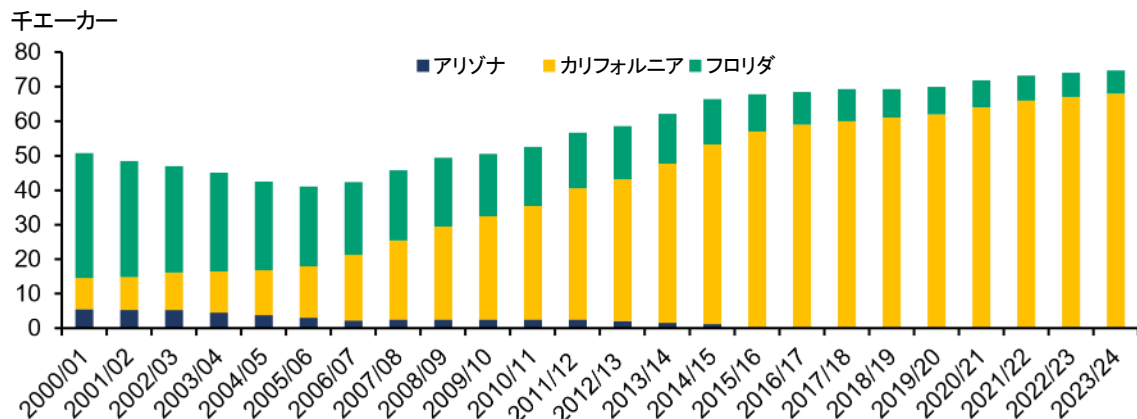
2023/24年度にはグレープフルーツ果汁の輸出入が減少： グレープフルーツ果汁の販売年度は10月に始まり、翌年の9月に終わる。2023/24年度のグレープフルーツ果汁の輸入量は600万ガロンと予想され、これは2022/23年度から33%の減少となる。今シーズン、総供給量に占める国内産グレープフルーツ果汁の割合は36%に達すると予想されている。このシェアは、2003/04年度に1%未満だった20年前に比べて大幅な増加となる。2023/24年度のグレープフルーツ果汁の総輸出量は、少なくとも50年間で最も低い水準である390万ガロンと予想されている。カナダ、韓国、英国、日本が、2023/24年度の米国産グレープフルーツ果汁の主要な輸出市場になると予想されている。

2023/24年度のタンジェリン生産量は増加： 2023/24年度(11月～10月)のタンジェリン、マンダリン及びタンジェロ(以下、タンジェリンと総称する)の生産量は112万トンで、2022/23年度の96万3千トンから16%増加した。米国産タンジェリンの約70%は生鮮市場向けであり、30%が加工に仕向けられている。2023/24年度の生産額は、2022/23年度に比べて34%増加し(10億3,500万ドル)、10億ドルの大台を上回った。

米国のタンジェリン生産量は、カリフォルニア州(96%)とフロリダ州(4%)に集中している。2023/24年度のカリフォルニア州のタンジェリン生産量は110万トンで、2022/23年度の94万トンから17%増加した。同州

の結果面積は、今世紀になって以来毎年増加しており、平均1万375エーカー（2000/01～2003/04年度）から6万6,250エーカー（2020/21～2023/24年度）へと6倍に増加した（図29）。カリフォルニア州のテュレアとカーンの2つの郡は、2024年の同州のマンダリン及びマンダリンハイブリッドの結果面積の70%（各郡それぞれ39%及び31%）を占めた。

図29 タンジェリンの結果面積がカリフォルニア州で過去最高に



注：タンジェロを含む。2015/16年度以降、アリゾナ州はタンジェリンの年次調査に含まれなくなった。

出典：農務省農業統計局のデータに基づき経済調査局が作成

フロリダ州の2023/24年度のタンジェリン生産量は2万1千トンで、2022/23年度の2万3千トンから9%減少した。州内の結果面積は、平均7,175エーカー（2020/21～2023/24年度）で、2000年代初頭（2000/01～2003/04年度）の同2万2,925エーカーの3分の1未満である。

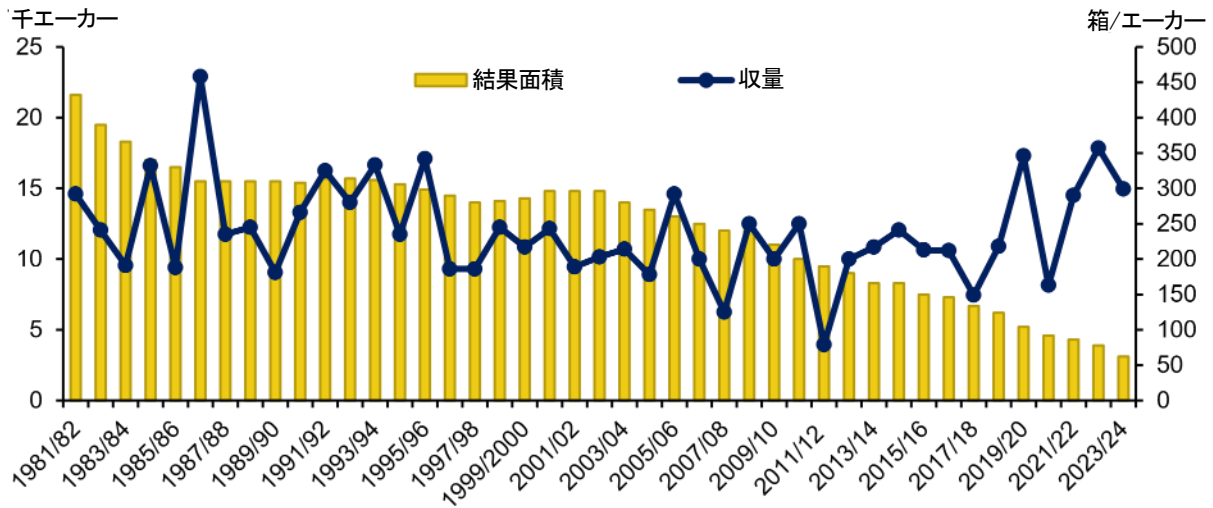
2023/24年度にはフロリダ州の生産量の76%が生鮮市場に出荷され、過去3年間（2020/21～2022/23年度）の平均である67%を上回った。2023/24年度の生鮮タンジェリンの生産者価格は前年比で28%上昇し、フロリダ州の生産額は前シーズンに比べて19%増加した。

生鮮タンジェリン（マンダリン及びその他の *Citrus reticulata* のハイブリッドを含む）の輸入量は、今シーズンこれまでのところ（11月～7月）前年比13%増加し、主要輸出国であるチリ、ペルー、モロッコからの入荷量が増えた。生鮮タンジェリンの輸入は通常9月にピークを迎え、国内供給量の約44%（2020/21～2022/23年度）を占め、これは2000年代初頭のシェアのほぼ2倍である。生鮮タンジェリンの輸出量は、今シーズンこれまでのところ（11月～7月）昨年と比較して15%増加しており、同期間にメキシコに出荷された量が増加している。メキシコの柑橘類生産は近年、高温と不規則な降雨のため困難に直面している。米国の生鮮タンジェリン輸出量は、通常2月または3月にピークに達する。

2023/24年度のレモン生産量は減少：2023/24年度のレモンの生産量は102万トンで、2022/23年度の109万トンから6%減少したが、3年平均を上回っている。米国のレモン生産は、カリフォルニア州（約95%）とアリゾナ州（約5%）に集中している。タンジェリンと同様に、国内のレモン生産量の約70%は生鮮市場向けで、残りの30%は加工市場向けである。2023/24年度のレモン生産額は、前シーズンより22%増加した。

カリフォルニア州の2023/24年度のレモン生産量は98万4千トンで、2022/23年度の103万トンから5%減少した。同州の結果面積は2010年代初頭から徐々に増加しており、2024年には5万3千エーカーと推定され、1980年代初頭以来最高となった。アリゾナ州の2023/24年度のレモン生産量は3万8千トンで、2022/23年度の5万6千トンから32%減少した。カリフォルニア州とは対照的に、アリゾナ州のレモンの結果面積は、今世紀の始め以降大幅に減少し、平均1万4,600エーカー（2000/01～2003/04年度）から同3,975エーカー（2020/21～2023/24年度）に減少した（図30）。収量は2022/23年度よりは低かったものの、過去3年間の平均（2020/21～2022/23年度）を上回った。2023/24年度には、アリゾナ州の生産量の82%が生鮮市場に出荷され、過去3年間（2020/21～2022/23年度）の平均である73%を上回った。

図30 アリゾナ州のレモンの栽培面積と収量 1981/82～2023/24



注：1箱は80ポンドに相当する。

出典：農務省農業統計局のデータに基づき経済調査局が作成

2023/24年度(8月～7月)の生鮮レモンの輸入量は、アルゼンチンとチリからの輸入量の増加に牽引され、前年比17%増加した。近年(2019/20～2023/24年度)、アルゼンチン(36%)、メキシコ(31%)、チリ(29%)の3カ国が生鮮レモンの輸入量の平均96%を供給している。近年では、輸入品の生鮮レモンは国内の供給量のほぼ4分の1を占めている。2023/24年度の生鮮レモンの輸出量は、2022/23年度に比べて1%未満の微増であった。生鮮輸出量の約4分の3は、暦年の前半(1月～6月)に出荷される。2023/24年度には、韓国とメキシコへの生鮮輸出の増加が、上位の輸出先であるカナダと日本へ輸出の減少を埋め合わせた。

2024/25年度の米国の柑橘類シーズンの見通し

農務省農業統計局は2024年10月に、米国の2024/25年度の全柑橘類の生産に関する当初予測を発表する。一方、カリフォルニア州食品農業局の2024/25年度カリフォルニア州ネーブルオレンジ実測調査報告書に掲載された早期予測では、カリフォルニア州のネーブルオレンジの生産量は、2023/24年度の生産量から2%の増加となる7,800万箱(40ポンド/箱)に達するとされている。予測される増加は、主に果樹当たりの着果量が24%増加したことによるものである。ただし、果実の直径は2.063インチで5%減少すると予測されている。

フロリダ州の2024/25年度シーズン最初のオレンジとグレープフルーツの成熟度テストの結果は、9月12日に農務省農業統計局によって発表された。サンプリングされた果実は、早生のオレンジ(ネーブル等)、中生の非バレンシアオレンジ及び赤肉と白肉の種無しグレープフルーツ等であった。この調査では、早生の品種では2024/25年度は2023/24年度よりも原料1箱当たりの果汁(加工・精製されていない生果汁。以下同じ)と果汁中の固形分が少ないが、中生の非バレンシア種では果汁が多く、固形分が少ないことが示唆されている。また、2024/25年度の赤と白の種無しグレープフルーツの果汁と固形物は、2023/24年度を下回った。